

この人に聞きたい インタビューコーナー

六年前厚生労働省で初めて育児休暇を取った男性として話題のとなった高倉信行さん（厚生労働省年金局年金課長）、そのいきさつや体験からのメッセージを伺いました。



質問一 父親として育児休業を取った経験ありとのこと。どんないきさつだったか？

少子化問題を正面から掘り下げた平成十年版厚生白書の作成に関わったことが背景にあります。社会保障行政を志して厚生省（当時）に入り十数年、当時は大臣官房の企画官という管理職の入口ポストにいましたが、白書の仕事を通じ、我が国の近年の少子化の根底には、「家庭

より職場を優先することが当然」という職場優先の企業風土と、「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割分担の考え方があり、この二点を改めなければ日本の将来は明るくならないとの認識に至りました。

その頃、偶然にも結婚十年以上を経て初めて一人息子の誕生という大きな恵みを与えられることがわかりました。私は国家公務員、妻は民間企業人で、どちらも夜遅くまでの残業が常態という働き方できていましたが、そのままでは育児と両立しませんが、仕事と生活の時間配分を大きく見直すこととしました。

その際、固定観念の見直しを社会に問題提起しておきながら自分自身はそうしないというのは「言行不一致」になってしまいます。そこで、正直ためらいはありましたが、「言うだけでなくやってみる」ことにしました。具体的には、誕生後年末までは妻の方が産休から続けて育児休業（母乳栄養）、その後バトンタッチして新年から年度

末までは父親が育児休業（粉ミルクと離乳食）、四月からは日中は保育所利用、夕方から妻の実家に子どもを預かってもらい、夫婦のどちらかまたは双方ができるだけ早く家に連れ帰って育児、という段取りを当面の計画としました。その後、幸いこの予定に沿って進むことができ、かけがえのない経験を得ながら今日に至っています。

質問二 「ためらい」を乗り越えた先輩として、後輩へのメッセージは？

父親の育児休業はまだ少数派。自らを振り返ると、例えば「娘が働き続けることに恐縮する妻の実家、夫の両親の心証を気遣う妻」も現実でした。そして最大の「壁」は、自分の心の中。

周囲から奇異に見られるのではないかと、育児の主役などできるのか、といった思いです。しかし、できない理由、やらない理由を探せばかりいては何も始

まりません。実践こそが自分のためにも世の中のためにもプラス。自信をもって踏み出すことをお勧めします。

質問三 企業のトップや管理職の皆さんへのメッセージは？

そうはいっても周囲の理解と協力がなければつらいもの。特に職場のトップや上司にあたる方々の意識が重要です。これらの時代、男女を問わず仕事と家庭や地域での生活を弾力的に両立できる社会に切り替えなければ急速な少子化の流れは変わらず、個人にとっても、社会経済全体にとっても大きなマイナスです。我が社には関係ない？決してそうではありません。両立しやすい職場にこそ優秀な人材が集まる時代です。

次のURLもご参照下さい。
<http://www.mhlw.go.jp/shingij/2002/09/s0913-5.html>

「育児」を自信を持って語れる男性ってステキですね。
「父親で育児休業を取らないのは少数派」と言われる時代が一日も早く来ることを願います。

この情報誌に関するご意見・ご感想・取り上げて欲しいことなどありましたら、下記までご連絡ください。

編集 男女共同参画情報誌編集委員

発行 〒895-8650 薩摩川内市神田町3番22号 薩摩川内市役所 企画政策部 企画政策課 男女共同参画係
TEL 23-5111 (内線4841) FAX 20-5570 Eメール: gender@satsumasendai.jp